ほめの理由認知のズレ要因の検討

高崎文子

(熊本大学)

ほめの理由, 認知のズレ, ほめの立場

A factor of the perception gap of praised reason

TAKASAKI Fumiko

(Kumamoto Univ.)

Key Words: praised reason, perception gap, a standpoint on praised situation

目 的

ほめることで期待通りの効果を得るためには、ほめ手の意図が受け手に伝わるのが前提となる。しかし実際には、ほめ手と受け手では、ほめるべき対象やほめるべき状況の認識などが一致しない場合もあると考えられる。そのようなズレを生じさせる理由として考えられるのは、ほめの機能をどのように考えどのような効果を期待しているのかという「ほめのとらえ方」が異なることにあるのではないだろうか。特に、ほめる側とほめられる側では「ほめのとらえ方」が異なる可能性があり、またほめの対象者の年齢によってもほめを用いる意図やほめの受け止め方が異なるのではないだろうか。

そこで本研究では、ほめの理由をどのように認知しているのかについて、ほめ手と受け手という立場や小中学校の児童と大学生という対象者の年齢によって違いがどのように生じるのか検討することを目的とした。

方 法

調査対象者：大学生 240 名（女性 154 名, 男性 85 名）

方法：「教室で学生／子どもが発表後に教員にほめられる」という仮想場面を用い質問紙調査を行った。ほめられる対象者の年齢によって、大学場面と小中学校場面の 2 場面を設定した。それぞれの場面において、第 3 者として／ほめる側（教師）として／ほめられる側（学生／子ども）としての 3 つの立場からほめの理由の評価をさせた。ほめの理由として「内容が優れていた（優秀）」「ある程度のレベルに達していた（基準）」「発表の仕方がよかった（態度）」「努力のあとが見られた（努力）」「普段から意欲的（人格）」「今後も積極的に発表してほしい（継続）」「自信になる（自信）」「信頼関係を作りたい（関係）」の 8 つを提示し、「対象者がその理由でほめられたと思うか（第三者）」「教師だったら対象者をその理由でほめるか（ほめる側）」「対象者だったらその理由でほめられたと思うか（ほめられる側）」について、5 件法でたずねた。

結 果

小中学校場面と大学場面別に、立場ごとの各ほめの理由得点を集計し、ほめの理由（8）と立場（3）の 2 要因を独立変数、ほめの理由得点を従属変数とした分散分析を行なった。

その結果、大学場面では、理由 ($F(7,5019)=339.45, p<.001$) と立場 ($F(2,717)=35.08, p<.001$) の主効果が有意であり、交互作用 ($F(14,5019)=5.91, p<.001$) も有意であった。多重比較の結果、優秀：第 3 者<ほめる側、態度：ほめられる側<ほめる側、努力：ほめられる側<第 3 者<ほめる側、人格：ほめられる側<ほめる側、継続：ほめられる側<ほめる側・第 3 者、自信：ほめられる側<第 3 者<ほめる側、関係：ほめられる側<ほめる側・第 3 者、のような有意な得点の差がみられた。

小中学校場面では、理由 ($F(7,5019)=292.63, p<.001$) と立場 ($F(2,717)=22.92, p<.001$) の主効果が有意であり、交互作用 ($F(14,5019)=14.81, p<.001$) も有意であった。多重比較の結果、優秀：第 3 者<ほめる側・ほめられる側、基準：ほめる側・第 3 者<ほめられる側、努力：ほめられる側・第 3 者<ほめる側、継続：ほめられる側<ほめる側・第 3 者、自信：ほめられる側<第 3 者・ほめる側、関係：ほめられる側<第 3 者<ほめる側、のような有意な得点の差がみられた。

考 察

大学場面では、各理由全般においてほめられる立場のほめの理由得点が低く、第 3 者や教師がほめるべきととらえていても、ほめられる側はそれほどの自己評価をしていないことが示された。小中学校の子どもを対象とした場面では、「優秀」「基準」のような成果をもとにした理由では、ほめられる側のほめの理由得点が高く、その他の理由ではほめる側の理由得点が高かった。特に「継続」と「自信」は大学場面に比べて、第 3 者や教師がほめる理由として高い評価をしていた。ほめの立場や対象者の年齢によって、ほめの理由のとらえ方が異なることが示された。